

## 科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 29 年 5 月 26 日現在

機関番号：13301

研究種目：若手研究(B)

研究期間：2012～2016

課題番号：24720149

研究課題名(和文)ソヴィエト的主体形成における所有と交換：スターリン期の公式文学研究

研究課題名(英文)Property and exchange in the formation of Soviet subjectivity: A study of official literature under Stalin

研究代表者

平松 潤奈(Hiramatsu, Junna)

金沢大学・国際基幹教育院・准教授

研究者番号：60600814

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 2,800,000円

研究成果の概要(和文)：本研究は、新経済批評の観点から、「交換」の概念を基軸に、(当初の計画を拡大し)1920年代から1970年代のソヴィエト文学の重要作品を分析し、交換形式と「ソヴィエト的主体」の変容がどのように連動しているかを検討するものである。具体的には、A. プラトーフ、M. ショーロホフ、A. ソルジエニツィン、Yu. トリーフォフらの作品を同時代の政治・経済状況や経済的言説のなかに位置づけ、ソ連においては政治に従属したはずの経済的領域が、実際にはソヴィエト的主体性の形成に深くかかわっていたことを論じた。

研究成果の概要(英文)：This study takes the approach of new economic criticism and examines major works of Soviet literature (expanding the original plan) from the 1920s to the 1970s in terms of the representation of “exchange,” exploring the interconnection between the historical transformation of the “Soviet subjectivity” and that of the mode of economic exchange in Soviet society. Contextualizing the works of such writers as A. Platonov, M. Sholokhov, A. Makarenko, A. Solzhenitsyn, and Y. Trifonov within the politico-economic situations and discourses of their times, this study argues that economic elements, which were supposedly subordinate to politics, in fact, played a significant part in the formation of Soviet subjectivity.

研究分野：ロシア文学

キーワード：新経済批評 スターリン文化 全体主義文化 社会主義リアリズム ソヴィエト文学

### 1. 研究開始当初の背景

従来のソヴィエト文学・文化論の多くは、経済領域の表象にあまり重要性を見出してこなかった。その理由としては、まず一つ目に、ソ連体制下において、経済は完全に政治に従属するものとなったため、それ自体として意味のある自律的領域を形成してこなかったことがある。そして二つ目には、ソ連の文化・芸術は「社会主義リアリズム」の教義をはじめとする強力なイデオロギー統制のもとに置かれていたため、経済領域の表象も単なる政治プロパガンダにすぎず、分析に値するものではない、と考えられてきたことがある。

また、ソ連崩壊後のロシア思想界では、ボードリヤールのシミュラクル論の影響のもと、ソヴィエト社会主義とは、もっぱら記号システム内部の戯れとして存在する「シミュラクル社会」(表象からなる社会)の先駆けだったという議論が流行する。この観点については、一方では、一般市民の現実の生活は、そうしたイデオロギーとはまったく関係のない次元で営まれた、という理解をされている。しかしその一方で、まさにそのようなシミュラクルこそが、現実のふつうの人々の精神構造や日常を構成したのだ、という解釈もある。近年の欧米の新しいソヴィエト史学やソヴィエト文化論は、どちらかというと後者の立場に立ち、プロパガンダ的・虚構的と思われてきた文化表象が、実は単なる粉飾ではなく、行為遂行的な力をもち、現実の生活を方向づけたと考えるようになってきている。そこで、本来的には経済体制の転換としてあったロシアの社会主義革命以後の文学を分析し、そこに現れる経済言説が、なんらかの現実規定的な意義をもち得たかどうかを検討してみる必要がある。

### 2. 研究の目的

本研究は、ソ連の文学テキストの中心的ナラティブである「新しい人間」の形成過程が、同時代の社会主義経済政策とどのように関わっているかを明らかにするものである。ソヴィエト社会においては、その初期から、政治・経済的な革命と同時に、「人間」そのものを社会主義社会にふさわしいものへと根本的につくりかえる、という課題が立てられていた。本稿では、「所有」と「交換」という経済的な側面に焦点をあて、私的所有・市場交換に基づいた西欧近代社会の自律的主体とは異なる、集団的所有に基づいた「新しい人間」(「ソヴィエト的主体」)がどのように構想され、文学テキストにおいてどのような固有の表象形態をとっていたかを論じる。ソヴィエト文学を、権力への従属や抵抗、あるいはプロパガンダやその暴露として(「全体主義論」的に)捉えるのではなく、社会主義の理念が現実に実行される過程において付随的に現れた、諸矛盾の表象として理解することを目標とする。

### 3. 研究の方法

主に1920~40年代のソ連文学を対象として、経済政策の蛇行と文学作品における所有と交換、「新しい人間」の表象との関係を跡づける。

上記の期間は、NEP期、上からの革命期、盛期スターリン時代、第二次世界大戦期・戦後の4期に分けることができる。これらの時期に関して、文学作品以外にも、同時代の批評、政治・経済的言説や経済状況についての資料などを参照することによって、文化表象を社会状況の変容のなかに位置づける。

### 4. 研究成果

#### (1) プラトーフに関する研究

まず、1920年代から1940年代のソヴィエト文学史にとってとりわけ重要な作品を書いた作家アンドレイ・プラトーフを主要対象として研究を進めた。彼の作品のなかでも『チェヴェンゲール』は、1920年代後半、つまりソ連社会がどのような経済体制を築くべきか模索したNEP期の終わり頃、そしてスターリンが権力を掌握して「上からの革命」(急激な集団化・工業化)を実施するにいたる直前の時期に書かれたとされ、内容においても、 Kommunismusにもとづくユートピア建設を目指す人々のコミュニティを描いているという点で、本稿の主題に適合するものである。

従来、この作品は反革命的・反ユートピア的な作品と理解されることが多かった。というのも、作品では Kommunismus建設の失敗がアイロニカルに語られているとされていたからである。しかし近年は、ソヴィエト文化研究全体においてこれまで当然とされていた全体主義的読解(この場合、テキストに反体制的な要素を探そうとする傾向)を見直す気運が高まり、そうした研究動向のなかで同作も、実は革命ユートピアを肯定し、ソヴィエト的主体の可能性を模索するものだったのではないかとみなされ始めている。こうした先行研究を受け、本研究は、同作における政治経済的なストーリーや表現について検討を行った。

物語の筋に即すと、この作品は、反革命的なのではなく、反市場経済・資本主義的であると同時に、国家による社会主義も拒絶する革命ユートピアの構築を描いている。これを交換という観点から整理すると、市場経済における商品交換と、国家による再分配形式の交換の拒絶だと言い換えることができる。そして、国家組織や商品交換を排除した共同体において、互酬的な交換関係を打ちたてるプロセスが、ユートピアとして描かれるのである。

『チェヴェンゲール』が特異なテキストとなっているのはしかし、第一に、こうした商品交換排除の企図があるにもかかわらず、商品交換にかかわる表現を用いて、互酬的な交

換関係が記述されることである。本研究では、1920年代の経済に関係する理論的言説（移行期の経済状況を分析し、同時にどのような非資本主義・非市場経済、法制度などが可能かを模索する議論）を調べ、それが『チェヴエングル』の言語に反映されていることについて考察した。

さらに『チェヴエングル』に特徴的なのは、経済的関係（交換形式）の転換の試みが、人間主体の心的構造の変容と結びつけられている点である。この問題について、西欧近代哲学において構築された主体概念が、商品交換経済・貨幣経済の発達と関係している、という当時の議論（プラトーフに影響を及ぼしたとされる）を参照しつつ、『チェヴエングル』の商品交換と国家的再分配とを廃した共同体において、近代的主体の概念がどのように崩壊させられていくか、そしてそれが小説においてどう肯定的に描かれているかを分析した。

上記の主要論点を踏まえつつ、商品交換を廃した状況下での人間主体構築と、人間どうしの統合システムについての構想が、同時にいかに商品交換の概念に依拠しているかについて論じた。さらに、商品交換を廃した経済体制において生じる主体崩壊というプラトーフの思考実験が、その後のスターリンの「上からの革命」によって生じる社会と主体の変容にどのような道を開くものだったか、プラトーフが『チェヴエングル』から『土台穴』（1930、1920年代末からの集団化を描いた小説）に移行する過程で捉えた状況認識を検討した。

学会発表 においてこれらの検討を行い、特に においては、新経済批評の観点から海外の研究者とともにパネルを組織し、19世紀のロシア社会主義思想や後期ソ連文学に関しても、経済的側面に着目するアプローチを共有することができ、またプラトーフをソヴィエト的主体研究の点から考察している研究者のアドバイスを心得ることもできた。以上のような研究を踏まえての論文文化が見込まれている。

## （2）ソヴィエト社会における一元論と二元論：ショーロホフ研究

1920年代のプラトーフの作品においては、西欧近代的主体に見られる二元論的な構造が否定され、一元論的な世界観にもとづくユートピア構想が展開する。プラトーフとその同時代人にとって、心身二元論の克服という哲学上の課題は、そうした二元論的哲学主体の経済基盤とみなされた貨幣経済や私有制の克服の一環であったわけだが、こうした壮大な企図はセクシュアリティの領域における変革意識とも結びついていた。貨幣・市場・資本主義経済や私有制が生んだ近代的主体、個人主義、二元論の克服によって、世界を一つの無差別的なエネルギー循環・均衡とみなす思考が生まれ、個人と個人のあいだに

存在する境界や、社会的なもの（精神）と生物学的なもの（身体）のあいだの障壁を撤去することが是とされた。つまり、人間どうしの身体的関係性や人間とモノとの関係性が流動化し、また、再生産の領域が生産の領域のなかに編入されて、生物学的な問題（生死など生政治の領域）が社会的な問題（狭義の政治やイデオロギー問題）と同レベルで論じられるようになった。

このような一元論化の傾向は、20年代のテクストにおいてひろく共有された。本研究では、ミハイル・ショーロホフ『静かなドン』を対象として、ジェンダー・セクシュアリティの問題系（生政治）が、コサックという社会集団の解体というポリシェヴィキ政権の政策（狭義の政治）とどのように結びつけられ表象されているかを示した（図書の ）。

『静かなドン』は1920年代後半から1940年代という長い期間にわたって執筆・出版されたものであり、スターリン時代のイデオロギー変容過程が刻印されている。図書 では、同作品のなかに、1930年代に確立するスターリン時代の文化イデオロギー（社会主義リアリズムの規範）のもとで、一元論が否定され、二元論に戻っていく過程を追った。1930年代以降に発表・再版されたテクストでは、社会的なものと生物学的なものとを同一のレベルで扱うことが禁じられ（検閲や批判的な批評によって、当初のテクストが改編されていく）、セクシュアリティと政治の分野での人間関係に関する流動的でエネルギー一元論的な理解が抑圧され、「生物学的なもの」が一定の領域に囲い込まれていく。つまり、コサックや女性という作品の主要登場人物は、「生物学的」存在として描き出されるが、その生物学性を統制すべき革命家の形象が現れ、物語のなかで、コサックや女性だけでなく、己自身の身体も破壊させていき、純粹な精神として表象されていく（テクスト上でも、革命家の表象が検閲で統制される）。

スターリン時代（特に30年代後半から）の精神・身体表象やジェンダー・セクシュアリティ表象に見られるこのような二元論の台頭は、当時の政治経済秩序における国家再分配形式（ヒエラルキー構造）の確立、そしてブルジョア的価値観の復活として論じられてきた「大後退」期の文化全般と関係している。

なお、20年代からスターリン時代にいたる経済政策と文化表象との相関関係については、学会発表の において整理して報告した。

## （3）スターリン時代から後期ソ連への移行期の研究

本研究を進めていく過程で、ソ連時代において交換形式に関する社会の価値観に大きな変容が起こったのは、当初研究を予定していた1920-40年代とともに、スターリン体制が終わったときであった、という認識を強め、1950年代から1970年代（スターリン時代末

期から「雪どけ」期を経て「停滞」期にいたるまで)の文学を検討することとした。

スターリン時代は、(1)に記した交換形式によって分類するならば、国家による再分配が純化した時期だと言える。その時代が終わり垂直的な再分配形式の支配が弱められ、人々を統合するモメントとして水平的結びつきが肯定的に表象されはじめる、というポスト・スターリン期の傾向を把握したうえで、最近進んでいる「プラート」についての研究に着目した。「プラート」とは、公式再分配経済の不備を補完する、非公式コネクションを基盤にしたモノの互酬交換であり、雪どけ期以降の文学作品においては、「プラート」表象が頻出する。

本研究は、1950年代にデビューしたアレクサンドル・ソルジェニーツィンとユーリー・トリフォノフの作品を対象として、それらを「交換」や「プラート」の観点から読み直すこととし、まず、ソルジェニーツィン『イヴァン・デニーソヴィチの一日』(1962)において、収容所における再分配形式(班単位の労働、ノルマ査定、配給など)が、いかに「プラート」という非公式な互酬交換へと置換され、後者が前者に寄生(抵抗ではなく)していかを検討した。さらに、「プラート」は、所属するグループの利益を優先する利己的で物質追求的な行動ともみなされうるが、そうした道徳的欠陥を補完するものとして、「プラート」を美しい互酬的関係として理解しようとする読解・イデオロギーが現れること(そしてソルジェニーツィンのテキストもそのような読解を促すものであること)を論じた。

次に、停滞期を代表する作家トリフォノフの中編『交換』(1969)を分析した。この作品では、上記のような道徳的正当化がもはや不可能になるほどに蔓延した「プラート」が、きわめて否定的に描かれている。しかし、こうした作品と、社会の道徳崩壊を危惧する批評言説の背後には、雪どけ以降、スターリン時代に緊密に組み合わさっていた国家テロルと国家再分配の連動関係に終止符が打たれ、暴力をとまなわない物資の大量配分が開始されたという社会状況がある。特に停滞期に起こった「消費革命」を経て、交換様式や主体のあり方は大きく転換した。

このような日常の「正常化」によって、スターリン時代についての見方も変容する。本研究はさらに、同じトリフォノフがスターリン時代に書いたテロルを支持する作品『大学生』(1950)と、同様の題材を扱いつつもテロルの記憶を問題化した停滞期の小説『川岸の家』(1976)を分析し、テロル観がどのように変わったか、つまりは、主体のあり方がどのように変わったのかを検討した。両者の大きな違いは、『大学生』の主人公がイデオロギー的立場の選択を迫られているとしたら、『川岸の家』においては、同じ問題がすべて物質的損得の観点から読み替えられ

ていることである。

さらに『川岸の家』は、停滞期ソ連体制によるテロルの記憶の抑圧があるなかで書かれたテキストであり、検閲をかいくぐるための様々な文学手法(「イソップの言葉」)が注目に値するが、それを本研究は、体制への抵抗という形での体制からの自由というよりは、体制と癒着した形で得られる「内的自由」として論じた。「イソップの言葉」も、「プラート」と同様に、公式の再分配システム(あるべき言語秩序)に寄生しながら同時にそれを迂回して読者との共同体(互酬関係)を形成するものだからである。

以上のように、スターリン期からポスト・スターリン期への交換様式の転換という問題を、学会発表と図書において扱った。

## 5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕(計 0 件)

〔学会発表〕(計 7 件)

平松 潤奈「社会主義リアリズムにおけるリアル表象、欲望、存在」シンポジウム「社会主義リアリズムの国際比較」, 東京大学, 2016年12月18日

平松 潤奈「再始動する批判的知性」ポスト・スターリン期の文学と社会」岩波ロシア革命論集研究会、東京大学、2016年6月19日

Junna Hiramatsu, "Money, Body, Language: Medium of Exchange in A. Platonov's *Chevengur*." ICCEES IX World Congress, Makuhari. 2015年08月07日

平松 潤奈「『ソヴィエト文明の基礎』とソヴィエト文化研究の展開」ソヴィエト的言語と全体主義をめぐって」科研費研究「ポスト・グローバル時代から見たソ連崩壊の文化史的意味に関する超域横断的研究」研究集会、名古屋ガーデンパレス、2014年9月20日

Junna Hiramatsu, "Soviet subjects and the negation of money in A. Platonov's *Chevengur*." 6th East Asian Conference for Slavic Eurasian Studies, Seoul. 2014年6月28日

平松 潤奈「文学のなかの経済」ソビエト史研究会年次研究大会、東京外国語大学本郷サテライト、2014年6月21日

Junna Hiramatsu, "Property and Body in Early Soviet Literature." 4th East Asian Conference for Slavic Eurasian Studies, Kolkata. 2012年9月5日

〔図書〕(計 2 件)

浅岡善治・中嶋毅編『ロシア革命とソ連の世紀 第4巻 人間と文化の革新』岩波書店、2017年(近刊)(共著、平松潤奈「テロルから日常へ ポスト・スターリン期の文学と社会」を執筆)

Гречко В. и др. (ред.) Дальний Восток, близкая Россия: эволюция русской культуры с евразийской перспективы. Белград, 2015. (共著、Дзюнна Хирамацу, “Уничтожение тела в ранней советской литературе: женщины, казаки и революционеры в «Тихом Доне»” (pp. 167-183) を執筆)

〔産業財産権〕

出願状況(計 0 件)

名称：  
発明者：  
権利者：  
種類：  
番号：  
出願年月日：  
国内外の別：

取得状況(計 0 件)

名称：  
発明者：  
権利者：  
種類：  
番号：  
取得年月日：  
国内外の別：

〔その他〕

ホームページ等

## 6. 研究組織

### (1) 研究代表者

平松 潤奈 (HIRAMATSU Junna)  
金沢大学・国際基幹教育院・准教授  
研究者番号： 60600814

### (2) 研究分担者

なし ( )

研究者番号：

### (3) 連携研究者

なし ( )

研究者番号：

### (4) 研究協力者

なし ( )